

廃工場を夢に見た。

冷え冷えとした銅色の闇の天井を、打ち捨てられたまま手入れも掃除もされることがなく錆びつき腐食してゆく金属のパイプが、右に左に迷走している。広い工場のあちこちに、複雑な形に組み合わせられた機械が機能を停止したままうずくまり、それらのあいだを鉛色のベルトコンベアが結んでいる。すべてがしん——と動かない。

どこかでゆつくりと水が滴っている。夢の中でさえも眠りを誘うようなその単調な音は、あたかも絶命間際の者のかすかな脈拍のようだ。まだ生きているということより、もう死にかかっていることを示すための、暗い兆候。そして滴り落ちた水は工場のむき出しの地面に落ちて、小さな水たまりをつくっている。夢のなかでその傍らを歩くと、近づく人影に怯えたかのように、水たまりの水面がさわさわと騒いだ。

手を伸ばし、水に触れた。

冷たい。夜のように。

水は黒かった。オイルに似て、指にまとわりつき、粘ついた。すくいとると、手のひらのくぼみでとろりとまとまり、新しく小さな水たまりになった。黒い水面に、天井のパイプが映っている。

冷たい。その冷たさが快い。夢の中でさえも、味わうに足る心地のよさ。右手から左手に、そして左手から右手に、水を移し替えて、味わう。冷気。それはまるで慈悲のようだ。

だが、手のひらのなかの水は次第次第に体温を移し取り、生ぬるくなってゆく。それもはつきりと感じ取ることができる。指を開いて水をこぼそうとする。だがそのとき、突然手のひらがかあつと熱くなった。見ると、黒い水が燃えていた。ゆらぐ炎が、生き物のように頭をもたげてこちらを見つめている。そして次の瞬間、シュツと昔をたて、袖を伝って腕を駆けあがってきた——

そこで目が覚めた。

眠りのスイッチを切ったかのように、唐突で完璧な目覚めだった。開いた目に白い天井が見えた。部屋の明かりは、枕元のスタンドひとつを除いて全部消してある。

青木淳子は、小さなベッドの上に跳ね起きた。温かな布団をまくりあげると、両手のひらでばたばたと叩いた。布団の下の毛布も引っぱり出して、叩いた。次には布団と毛布の両方をベッドからはたき落とし、敷き布団を隅から隅まで叩いてみた。

ベッドは大丈夫のようだ。淳子は床に降りると、部屋の隅の壁のスイッチを入れて、天井の

電灯をつけた。まぶしい光に顔をしかめながら、部屋中を見回した。カーテンは？ カーペットは？ 布張りのソファは？ ソファの脇の籐とうのラックに入れてある編みかけのセーターは？ マガジンラックのなかの新聞や雑誌は？

どれも無事だ。くずぶつていない。煙はあがっていない。匂いもしないようだ。ここは大丈夫だ。

身をひるがえして立ち上がると、淳子は部屋を出て台所に入った。

流しのなかには、食器洗いの金属製のボウルを置いてある。寝る前に水をいっぱい張っておいた。その水から、今、ゆらゆらと水蒸気が立ちのぼっている。手をかざすと、温うん気きを感じた。風呂の湯ぐらいの温度になっているようだ。

淳子はため息をついた。

安堵あんどと緊張が、ないまぜになって押し寄せてきた。これは相性の悪い感情の組み合わせだ。落ち着かず、冷えた身体を両手でさすり、淳子は時計を見た。午前二時を十分ほど過ぎていた。

——行かなきや駄目かな。

この前あの廃工場へ出かけてから、まだ十日と経っていない。それでもあの場所の夢を見た。身体が必要としているのだろう。

放射し、解放することを。

サイクルが早くなってきた。ここ半年ほどばかりのあいだに、急激に。夢を見ることも

増えた。そしてその夢のなかで、勝手に熱を放射してしまうことも。今はまだ、無意識のうちに標的を定め、水のあるところ、冷却媒体のあるところを選んで放射しているからいいけれど、力が強くなってきているのだろうか。だから、こんなにも頻ひん繁はんに、無意識的な放射を行ってしまうようになったのだろうか。

それとも——

力を押さえる淳子のコントロール力が衰えてきているのだろうか？

それは考えるだに不吉なことだ。淳子は頭をひどふりすると、乱れた髪を手ですきながら、着替えにとりかかった。戸外の気温は摂氏三度。北風が窓を叩く、師走も押し詰まった夜のこのだった。

東京都荒川区、あらかわ田山町。

私鉄線荒川駅のひとつ先、高田たかた駅からバスで二十分ほど北に走ったところに、「田山町一丁目」というバス停がある。ひとつ先のバス停は「田山グリーンタウン入口」。ここが二丁目になる。三丁目は一丁目と二丁目の東側に細長く広がっており、現在分譲中の田山ガーデンハウスというマンションばかりがいやに目立つ、古い住宅地だ。十年ほど前までは、まだささやかな農地を耕している世帯もあったが、近頃はそれもめっきり減ってしまった。あるのはマンシ

ヨン、ニュータウン、分譲住宅、アパート、公営団地と種類こそ豊富だが、住宅ばかりである。団地のはずれにある橋をひとつ越えれば埼玉県で、そこもやはり延々と宅地がつづく。

昭和三十年代後半から四十年代にかけての高度成長期に、首都圏の人口分布のドーナツ化が始まったとき、このあたり一帯からもぬぐい去るように農地が消え、代わりに住宅開発が進んだ。そして昭和の終わりのころのバブル経済が、高度成長期を生き延びたわずかな農地の息の根も止めてしまった。田山町内だけに限ってみても、農地と呼べる場所は一カ所だけ、青木淳子の暮らすアパートから徒歩で五分ほどのところにある「佐々木農園ささきのうえん」というところで、百坪ほどあるその農園は、一年契約で切り売りで一般の人びとに貸し出される家庭菜園用のものだった。ちなみに、契約料は一坪年額二万円、契約者が多くて、新規申し込み希望者は現在空き待ち状態である。

一方、田山町には、古くからこの地に住み着き、自営業を営んできた人びとがいる。多くは、高度成長期以前、まだ田山町の大部分が第二種住居専用地域だったところに創業した中小企業で、印刷業、製本業、プラスチック成形金型製造業、建築業、運送業——と、業種は様々だ。しかし、荒川区がひいては田山町が、自分の存在理由を首都圏の住宅地になることに求め、地場産業の育成の道を捨てたとき、彼らの運命も決まった。現在までのあいだに、そうした小さな町工場の半分ほどが、都の区画整理事業に引っかかって準工業地域へと移されたり、廃業したりして田山町から姿を消した。残った工場や作業場も、住宅地のなかにとびとびに存在する異物

のように扱われている。騒音や廃棄物など、近隣の住人たちとトラブルになることも多く、先行きは暗い。もしも次の好景気・住宅ブームの波がきたら、今度は農地に代わって彼らが息の根を止められる番だろう。

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。